The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカ便り
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 1980, 19, p. 119-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53657
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アメリカ便り

ニューヨーク州立病院の周囲を７回も巡ったろうか。原始的にも歩数でプランの実測をしているのである。これはヘンリー・ホブソン・リチャードソンの大作だが、精神病院であるためか、地元バッファローの学生も調査を好まない。助手が居れば巻尺も使えるが、一人では歩測以外に手は無い。男女重軽症の各病棟が管理棟を中心に翼を広げたパヴィリオン形式で、東西数百メートルの規模である。これは指導教授レイナー・バナムのところで私が調べた３番目の建物で、ルイス・サリヴァンのギャランティー・ビルとダニエル・ハドソン・バーナムのエリコット・スクエアの後に彼が示唆したものである。この病院の次に彼が調査の御膳だてをしてくれたのはフランク・ロイド・ライトの名作マーチン邸だった。バナムは調査の前にどんな図法がその対象の把握に最適か問うのを常としたが、この場合はアイソメ等の立体図でインテリアを分析することが主眼となった。ここでバナムが屋内を中心とした調査を用意してくれたのにはプログラム外の理由もあったと思う―もう11月、バッファローはかなり寒い。

レイナー・バナムは歴史及び理論担当の教授だがデザイン・スタジオにもよく現われた。我々のパリ都市再開発プロジェクトの部屋にも何度か顔を見せ、ほんの数名の学生のために計画地周辺の歴史と現状について特別講義をしたこともあった。このようなバナムも秋の学期を最後にカリフォルニアへ去った。間も無くして、私もイエール大学のニュー・ヘヴンへ発った。

ヴィンセント・スカーリーの講義は実にダイナミックだった。３台のスライド・プ

ロジェクターを縦横に駆使し、良く通る声で語り続ける。バナムも名講師だが、そのユーモアを交えたにこやかな講義ぶりの背後には何か冷めたものがあった。一方のスカーリーは情熱的で、彼らは多くの面で好対照と思われた。実際に彼らは20年も前から互いに強く意識し合っている。従ってバナムの所からスカーリーの研究室へ行くという例は特別な情況以外では考え難く、あるいは私が逆のケースをも含めて最初で最後かも知れない。

フルブライト委員会から研究費を得て春の休みにシカゴへ発つ。一週間の予定でハイド・パークに宿を定める。1893年のシカゴ万博が開かれた場所の北にあたり、ライトのロビー邸も近い。モナドノックなど云ゆるシカゴ派のビルが建ち並ぶダウンタウンは南へ行くほど荒廃がひどく、ジョンハンコック・センター等のある北のほうが人気がある。ライトとプレーリー・スクールの地オーク・パークへ行く。十数年前から注目され始めた云ゆるプレーリー・スクールに傑作を見つけるのは難しく、ライトとの差は歴然としている。ライトの住宅はすべてが傑作なのではないが、初期の数例を除けば、その多くは案内を必要としない。背の高いヴィクトリアンやクイーン・アン住宅の中で彫りの深い水平の線を持つライトの作は視線を誘導する。オーク・パークとダウンタウンとの間、一番スラム化のひどい地域にフランシスコ・テラスはあった。住人はすべて黒人かプエルトリコ人のようで、その誰もそれがライトの設計になるものとは知らない。もっとも見晴えのする部分であった入口のアーチはオーク・パークに運ばれ新築のアパートに取って付けられ、こちらには将来の中産階級が住んでいる。イエールに帰り、この種の保存について意見を求めたが、彼は言葉を濁した。シカゴ土産はライトと彼の師サリヴァンそして知名度は低いがもう一人の師ジョセフ・ライマン・シルスビー等の作のスライド約五百枚。数週間の後、シルスビーについての小論がスカーリーに提出された。

スカーリーの講義はフランス庭園から始まり二十世紀に至ろうとしていたが、私の興味は逆に十九世紀へ向っていた。特に面白いのはフイラデルフィアの建築家フランク・ファーネスと彼の師リチャード・モリス・ハント。

このハントはパリのエコール・デ・ボザールを卒業した最初の米国人で、今世紀に迄至るアメリカの古典折衷の基礎を据えた一人だが、彼の初期の作は一種のネオ・グレックで仲々興味深い。「ハントとヴィオレ・ル・デュック」に関する小論をスカーリーに提出、この夏の調査はファーネスのフィラデルフィアから始めることにする。

七月からニューヨークはソーホーの南、ワールド・トレード・センターが真近に見えるロフトに居候、芸術家の街を楽しむ。これはマンハッタンを歩き廻るだけではなく、ニーヘヴンからは遠い地域への足場としても好都合で、フィラデルフィアへもここから発った。

ファーネス巡礼はペンシルヴァニア大学の図書館から始める。様々なエレメントが思いがけないスケールで構成され、その荒い肌と相俟って突然変異の怪物のようだ。ガウディに通じるところもある。この二階にルイ・カーンの記念展示室があり、アメリカ建築におけるフィラデルフィアの重要性を一言で納得させる。もうひとつのファーネスの代表作フィラデルフィア美術アカデミーは市役所の北に位置する。様式建築には違いないが、これがグレーとブラウンの地味な街並に加わった時に人々は色彩に満ちた新しい世界が始まるのを感じたであろう。そのインテリアは機械と装飾との間には何の矛盾もないことを示すばかりか、機械時代における装飾の無限の可能性を物語っている。二階のギャラリーに露出した鉄の梁や柱は美しく塗装され接合部には一種の様式化が見られるが、それらが鉄であることを誰も疑いはしない。階段の周辺には鉄や亜鉛の花が咲き、それらは機械仕掛けで今にも動き出しそうだ。ファーネスは輝くばかりの色彩で塗り分けられピカピカに磨かれた逞しい十九世紀の機械を持っていた。

早朝のワシントン行アムトラックを待ちフィラデルフィアの駅で眠る。一日中歩き廻った体には固いベンチも心地良い。ニューヨークへ戻る前にもう一度フィラデルフィアへ立ち寄り、ファーネスを見ることになるだろうう。